道具を使うもの　～Tool user～

水津の月

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界は、一人一人に適正道具《ツール》が存在する世界。そんな世界に生まれた主人公、沖原郷の物語。

目次

プロローグ　1
適正道具カリキュラム　4
適正検査室で　11
新たな敵？　16
閉まってました　19
アマンダ　22
Ｔ４Ａ１　25
番外編（人物紹介）　29
非日常の中の日常　33
非日常の現実　35
１章終話　37
特訓　39
特訓（沖原君の場合）　41
重い　43
再会？　46
再会　49
横の浜川から立つ優れた勝利の煙　51
平等　53
適正道具のリスク　55
特訓（智東さんの場合）　57

プロローグ

――――この世界は一人一人が適正道具（ツール）を持つ世界。この物語は、そんな世界の一少年の、笑いあり、涙ありの物語である…！

「異世界物語モノのテンプレみたいな導入だな。」

と、今若干、いや、かなりメタいことを話した僕は、沖原郷（おきはらごう）である。

僕は今日から高校一年生だ。今その高校に向かっているのだが、その高校は一人一人の適正道具を探し、そしてそれを活かしていく学校だ。ちなみに、受験はそこそこ難しかった。

この世界には、適正道具（ツール）という概念が存在する。あるものはシャーペンが適正道具で、人の倍以上の速さで文字を書けたり、またあるものは、土管が適正道具で、土管に入れば世界中のどこの土管にでもワープできる…らしい。

そんな自分の新しい可能性を期待しながら、高校までの道を歩いている。お金を無限に稼げたらいいなーとか宝石が無限に手に入ってウェヒヒな生活を送れたりしないかなーと思っていたら…

「よー。お前も彼埜高校（かのこうこう）だっけ？」

と話しかけてきたのが親友の日下部快人（くさかべかいと）である。

「おい。親友の進学先ぐらい覚えておけ。」

「悪かったな。どうせ俺は記憶力ないですよー」

「お前よく彼埜高校入れたな！」

「鉛筆転がして出た数字を塗りつぶしただけだが」

もうこいつの適正道具わかってんじゃん。

「まぁ…よろしくな！高校でも」

とまぁ、これまたテンプレな会話をしながら一緒に登校した。

「そういやなんでお前は彼埜受けようと思ったの？」

と快人に聞いてみた。すると、

「なんかなー。頭良い方じゃないじゃん？俺。だから、適正道具で人生一発逆転狙えないかなー…って。」

鉛筆じゃ無理だと思うぞ。お前。

「ほら、就職氷河期だし。俺ぁのままじゃまともな職場に行けないだろうなー…って半分賭けで受けた。」
「さいですか。でも受かってよかったじゃん。」
「まぁな。これで俺の人生も花開く！たぶん！」
　鉛筆でか。
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
　彼埜高校についた。適正道具を専門に扱うから結構デカいって聞いてたけど…こりゃ相当デカいな…
「はーい。みなさん。席についてくださいね〜」
　入学式が終わり、クラス分けも決まって皆それぞれの教室に分かれていった。
　僕は1―D、快人は1―Cだった。快人は授業について行けるのだろうか…
(補足！もちろん適正道具の事だけでなく、普通の教科も習うよ！)
「私がこのクラスの担任になります、称山(たたえやま)四季(しき)です〜。よろしくおねがいしますね〜。それでは、右の列から自己紹介をお願いします〜。」
「はい！木嶋(きしま)英輔(えいすけ)です！趣味は…」
　などというこれまたテンプレなホームルームも終わり…
「これでホームルームを終わります〜。今日は普通の勉強で、適正道具のカリキュラムは明日からになります〜。近くの人には、各自挨拶をしておいてくださいね〜」
　…一部「えー」という声も聞こえてきた。まぁ、皆適正道具が楽しみだろうからなー…
　それにしても称山先生はおっとりとした先生だな。口調も何気にタイプだ。
　…などと思っていたら、声をかけられた。
「はじめまして！今日からよろしくね！沖原君！」
　彼女は隣の席になった智東(ちとう)香里奈(かりな)さんである。ショートカットの黒髪に八重歯が特徴的な元気な子だ。趣味は同人制作らしい。少し意外だ。あとクラス全員に恥じらいもなくその趣味を言えるのもな

かなかにすごいと思う。
「はじめまして…えっと…よろしく…です…」
彼女は斜め前の席の宮内瑠璃(みやうちるり)さん。栗色のボブカットにメガネが特徴的な物静かな子。趣味は読書らしい。あとから聞いた話だと、このときは友達が欲しくて話しかけたらしい。可愛いな。
「よう！今日からよろしくな！」
と気さくに話しかけてくれたのは、前の席の赤海柊平(あかみしゅうへい)くん。赤髪がとても特徴的。中学時代のあだ名は刺身だったらしい。赤身魚…
この４人が生活班、そして、適正道具のカリキュラムもこの班ですらしい。
僕の適正道具(ツール)というロマン満ち溢れた高校生活が今、始まる！
～次回予告！～
「あなたの適正道具は…つまようじです。」
「えっ。」

適正道具カリキュラム

～～～前話の翌日、朝。～～～

「ｇｏｏｄ　ｍｏｒｎｉｎｇ！」

快人よ。なぜ英語なのだ。

「今日から適正道具カリキュラムだぜ！楽しみだな！」

「まぁ…楽しみだな、かなり。自分にどんな隠れた才能があるのか…ラノベみたいで。」

快人は鉛筆だろうがな。

「朝もはよから智東香里奈で～す！おはよー！沖原クン！」

智東さんから急に話しかけられた。

「えっ!?智東さん!?なんでこんなところに!?」

「家近くだからね。私彼埜に入るためにここに引っ越してきたから～。ほら、あの家！」

「えっ…」

意外に…近い。家から四軒奥ぐらいだ。

「それにしても私もこんな近くだとは思わなかったよ～！家出たら沖原クンとその他約一名がいるんだもの！私もびっくりしたよ！」

その他約一名扱いの快人…

「で、あなたはどなた？」

「お…俺は１―Ｃの日下部快人です。はじめまして。よろしくおねがいします」

「日下部クンね！私は智東香里奈！これからよろしく！」

（めっちゃ俺のタイプなんだけど。どういう関係だよ。）

（どうもこうも…隣の席だよ。）

（うらやまっ！俺と変われ！）

（無理だ。…僕も結構可愛いと思うけど…）

（チッ…爆ぜろ…）

（れ、恋愛感情はないからな！勘違いすんなよ！）

「な～にこそこそ話してるんですか～。コソコソ話イクナイ！はやく行きましょ！」

「そうだね。行こうか」
（趣味は同人制作だって伝えた時の反応が楽しみだな…）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「は〜い。今日は皆が待ちに待った、適正道具（ツール）のカリキュラムで〜す」
「よっしゃーー！」「キターー！」「Ｆｏｏｏｏｏｏ!!」
…等々、様々な声が聞こえてきた。朝のＨＲが終わり、一時限目が始まる前である。ものすごい盛り上がり様だ。
「では〜、適正検査室に皆さん移動してくださ〜い」
「称山先生！適正検査室ってどこですか？」
適正検査室だと!? ｗｋｔｋが止まらない！
「あ〜…言うのを忘れていましたね〜。私についてきてください〜」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

――適正検査室は、意外に近かった。
「では〜、あとはよろしくお願いしますね〜。」
と、適正検査室の先生に言い残し、称山先生は部屋を出た。
「あ〜…私は長走茜（ながばしりあかね）だ。この適性検査室で適性検査を担当している。」
と話したのはその先生だ。ショートの金髪にメガネをかけている、端正な顔立ちの女の先生だ。それにしても…長走って珍しい名字だな。初めて聞いた。
「え〜…君たちの待ちに待ったであろう、適性検査だ。班ごとに調べるから、まず1班。こっちに来てくれ。」
と、１班の人が先生と謎の機械が置いてある机へ行った。僕らは６班なので一番最後だ。
「えっとまず…君は…木嶋英輔君だね。この機械に手を入れてくれ。」
「はい…」
トップバッターは木嶋君だ。みんなの視線を浴びてとても緊張しているようだ。僕も気になる。
「君の適正道具（ツール）はね…つまようじだね。」

「えっ。」
「「は?!」」
木嶋君の気の抜けた声と皆の無駄に揃った声が聞こえる。まぁ、僕も驚いたけどさ…
「なぁ、適正道具がつまようじって何に使うんだ?」
赤身…ゲフンゲフン赤海君が話しかけてきた。
「さぁ…想像つかない。」
「能力はね…つまようじの先をMD、ミニディスクの事だが、MDにつまようじの先端を当てると音楽が聴けるようだ。」
「えっと…はい…ありがとうございました。」
「まぁ…そう落ち込むな。用途や能力を強化していくのがこの学校だ。これからも頑張れ。」
CDならまだしもMDか…と思っていると、長走先生が皆に声をかけた。
「まぁ、皆最初はこんなもんだ。あんまり最初の能力には期待しすぎるなよ。」
「マジかよ…」「そんな―…」
周りから落胆の声が聞こえてくる。まぁ仕方ないっちゃ仕方ないけど…僕もなんか変な適正道具なのかなー…
「では次―…」
と、しばらく過ぎて、やっと5班が終わった。
皆の適正道具はピンキリだった。適正道具は折り紙で脳内でイメージすれば一瞬で鶴や箱などの折り紙ができるという能力もあれば、適正道具が工具全般で、電気機器を直したりするのが普通の人より数倍早くできるというすごい能力まであった。
「えーと…次は6班だな。まずはじめに…赤海君。皆と同じように、この機械に手を入れてくれ。」
「はい」
赤海君もとてもワクワクしている様子だ。
「君の適正道具は…そうか…」
先生が小声でつぶやく。6班以外の人には聞こえないぐらいの声

だ。
「え～っと…先生、何ですか？俺の適正道具。」
　赤海君も小声で聞く。
「皆。先に帰っていてくれ。そういえば、称山先生から『適性検査が終わった班から教室で自習をさせてくださいね～』と言われていたのを忘れていた。すまなかったな。」
「称山先生の物まね上手っ！」
　と小声でつぶやいたのが誰かは知らないが、皆教室へと帰って行く。
「…赤海君。結果は後で伝えるから、とりあえず機械から手を抜いてくれ。」
「え～…はい」
　がっかりしたような、赤海君の声が聞こえた。
「では次に、智東さん。この機械に手を入れてくれ。」
「はい！わかりました！」
　ワクワクした感じで智東さんが機械に手を入れる。
「君も…か。すまないが、君も後でだ。」
　少し驚いた様な表情をしたものの、冷静に言う。
「えっ…は、はい。」
　智東さんも少し驚いたような、がっかりしたような感じで機械から手を抜く。
　それにしても…いったい何なのだろう。
「次は…宮内さん、この機械に手を入れてくれ」
「は…はい…」
　いつものおどおどしたような感じで機械に手を入れる。
「君もか…こんな例は今までにないな…すまない。君も後でだ。」
　長走先生はとても驚いているようだ。いったい何が…
「あっ…はい…」
　宮内さんが機械から手を抜いた。
「では次は…沖原君、だね。この機械に手を入れてくれ。」
「はい」

その読み取り機械を、僕は初めて近くで見た。なんか、こう近未来的な感じなのかなーとか勝手に思って
いたけど、手相の認証システムの機械ををちょっと大きくして蓋を付けたような感じだった。
「君もなのか!?そうか…こんなことは…なかなか…」
「えっと、いったいどうしたんです?」
驚きを隠しきれない長走先生に、僕は言った。
「では…話すぞ。このことは他言無用だ。まず…赤海君の適正道具なのだが…」
「何ですか?勿体ぶらずにお願いします!」
「…棒状のものだ。」
「棒状のもの…?なんかすごいアバウトですね…で、能力はなんですか?」
棒状のもの…?なんだ、それは…
「能力なのだが…棒状のものを投げるとき、とても速く、投げる間隔も短く投げられる。」
「えっ…それって…」
赤海君が驚いた顔で言う。まさか…
「そうだ。世に〝攻撃適正〟と伝わるものだ。」
マジか…攻撃適正とは、人や動物を攻撃するのに特化した能力だ。ハンターになる人もいるが、裏社会に出る人も少なくないらしい。
「先生…驚いていたってことは、もしかしてこの四人全員が…?」
智東さんも驚いたように言う。
「その通りだ…智東さん、あなたの適正道具は指輪。能力は、想像した〝魔法〟を発することができる能力だ。」
「えーと、それってどういう意味ですか?」
智東さんが質問する。
「例えば、ゲームにでできた凍らせる魔法を脳内で想像して、念じて放つと…本当に凍るんだ。」
「えぇ…そんな嘘みたいな…」
信じられないような顔の智東さん。

「それが…現実にできるんだ。そして、宮内さん、あなたの適正道具は玩具(おもちゃ)だ。」
「お…おもちゃ…？それがなんで…攻撃適正に…？」
　宮内さんも驚いた顔で言う。
「まぁ、正確にいうと攻撃適正に〝なりうる〟と言ったところか。例えば、星たちの戦いって映画があるだろ？」
「は…はい」
「あー、あの映画ね。面白かったわー。ライトセーバーとか出てくるやつね」
　と赤海君
「そう、そのライトセーバーを現実のものにできるんだ。玩具を本物にできる。例えば、ライトセーバーのおもちゃで本当に何でも切れるようになる。」
「は!?なにそれ強くね!?」
　赤海君を始め、４人がみんな驚いた。
「えっと…私は…危険？」
「そんなことはない。能力を間違って使わなければ、そうだな。例えばあひるのおもちゃを本物のアヒルにするマジックとか、そんなことに使えばまったく危険ではない。」
（マジックのタネが…）
「そして、沖原君」
「は、はい。」
　緊張するな…攻撃適正って…
「君の適正道具は刀だ」
「刀…？」
　刀って…結構危険な部類じゃ…
「その能力は、どんな刀でもを軽々と操れ、何にも負けない強度を持たせることができる能力だ。」
　どんな刀でも軽々と…ってことは大太刀の二刀流とかも可能ってこと…!?
「マジか…６班全員が攻撃適正持ちとか…」

赤海君はまだ驚きを隠せないようだ…
「つまり、私たちは要注意人物ってこと？」
と智東さん
「勝手に要注意人物にしてすまないが…その通りなんだ。君らなら悪用することはないと思うが…」
「悪用してる集団って…聞いたことある…」
と宮内さん。
「ああ。そんな道に進まないように、気を付けてほしいって話だ。あと…知っているのは私ぐらいだろうが…君たちにだけ話そう。話さないと、君たちが危険だろう。」
「何です？危険って…」
赤海君が聞いた。
「このあたりで活動している適正道具を悪用している集団だ。大人から高校生までいる。巧妙な手口で引き込んでくるらしいから、気を付けた方がいい。その集団の名前はＴ…」
バキューン
銃声が響いた。
弾丸は、長走先生の腹部を打ち抜いていた…
「え…今の…銃声…」
智東さんがおびえた声で言う。
「おま…え…まさ…か…」
長走先生のかすれた声
「あら～。それ以上は話させないわよ～？」
ドアの近くには、朝のＨＲと変わらない笑顔の、銃を持った…称山先生がいた。

適正検査室で

「称山先生…？」
　どこからどう見ても称山先生だ。しかし、称山先生がこんなことをするはずがない。
「長走先生！」
　智東さんが長走先生を確認しに行った。長走先生は撃たれたその場所に倒れていた。
「称山先生…ですよね…？なんで…こんな…？」
　赤海君が聞いた。
「あら～。この人が言ってはいけないことを言おうとしたから　口封　じ　しただけよ～」
　称山先生のいつもの口調ながら、とても強い声で言った。こんな称山先生は見たことがない。
「まぁ、あなた方にももちろん死んでもらいますよ～。私の秘密を知ってしまったわけですからね～。逃げようったって無駄ですよ～。私も攻撃適正持ちですから～」
　ダァーン
　銃声が響いた。その銃弾は、僕の足元に着弾した。
「た…称山先生…じょ…冗談ですよね？」
　僕は聞いた。
「あら～。私が嘘を言っているように見えるかしら～？」
　…体が怯んで動かない。だって…こんな…
「これが現実なら、やるしかないでしょ。何やってんの？みんな」
　そう発言したのは、意外にも智東さんだった。
「ごめん！長走先生！結婚指輪借りるね！」
　と、智東さんは急に長走先生の指輪を自分につけた。
「私の適正道具は指輪で能力は魔法なんでしょ？だったら…今やってるゲームの魔法に…」
「フレア！」
　称山先生の足元に、小さな火柱が立つ。これが…魔法…!?

「あら～。魔法ですか～。智東さん攻撃適正をお持ちなのね～…ふふ。面白いわぁ～私たちの仲間にならないかしら？」
「仲間って何よ。」
「さっきそこの長走が話してた〝集団〟のことよ～。ふふ。稼げるわよ～？」
「入るわけないでしょ！そんなの！」
「あら～。惜しいけれど…なら…死んでもらうしかないわね～。」
ダァーン
称山先生が撃った。
「プロテクト！」
智東さんの周りに薄緑色の結界のようなものが作られ、銃弾をはじいた。
「智東さん、何そ…」
「あんたら！のんびり見てる暇ないでしょ！称山先生をなんとかしないと、みんな死んじゃうのよ!?」
僕の言葉をさえぎって、智東さんが言った。
「まぁ…そーかもねー。やるしかないか。」
「赤海君!?」
赤海君が机の上に置いてあった二つのペンを持った。
「俺の適正道具がこれなら…とうっ」
ビュンビュン
赤海君がとてつもない速さで二つのペンを称山先生に向かって投げた。
「あら～、そんな遅いもの、かすりもしませんわよ～？」
称山先生はとてつもない速さで避けた…というよりも、いつの間にか避けていた。
「な…何が…」
赤海君もとても驚いていた。
「ふふ…。私、とても速いでしょう？」
…速いってレベルではない。まるで瞬間移動の域だ。
ダァーン

…また銃声が響いた。しかしこれは称山先生の居る方向ではない。
「戦いたくないけど…緊急事態…だから…仕方ない…。」
銃を持っていたのは宮内さんだった。
「宮内さん!?それどっから!?」
「長走先生のバッグに入ってた…」
いつの間に捜していたんだ…というか長走先生がどんどん謎の人物に…ってそんなこと考えてる暇なはい。僕は何かできないか?
「ナイス!宮内さん!じゃあ、私が称山先生を引き付けるわ!その間に銃で撃って!」
「…分かった。」
「よし…じゃあ…ヘイスト!」
智東さんもとても速く移動した。手にはハサミを持っている。
「いや〜、一応筆記用具持ってきといて正解だったわ。」
ダァーン、ダァーン、ダァーン。
今度は称山先生の銃だ。
「智東さん、危ない!避けて!」
「大丈夫!」
カーンカーンカーン
銃弾は全部智東さんの周りで弾かれた。そうか、プロテクトが…
「厄介な魔法ねー…ではこれはどうかしら〜?」
称山先生に接近し、ハサミの刃を当てる直前で称山先生が言った。
すると…
バーン
「なっ!?エネルギー弾!?」
智東さんのプロテクトを貫通した。智東さんは間一髪で避けたものの赤い光る弾が…銃から!?
「ふふ…私の攻撃適正はこれよ〜?」
そのまま、称山先生は何発も弾を放った。智東さんは全て避けるが…すべてギリギリだ。
「厄介ね…こんなの反則よ!」
「私には、あなたの魔法の方が十分反則に思えるけど〜。」

「…やるしか…沖原君！赤海君！ドアへ行って！」
逃げろ…ということだろうか？しかし…
「で…でも、置いていくわけには…」
「大丈夫！任せといて！」
「逃がさないわよ～…！」
称山先生がすかさずこっちへ来た。銃もこちらへ向けている。
「偏差…射撃…！」
「なっ!?」
それは宮内さんが放った弾だった。外れたものの、称山先生のすぐ前を通った。称山先生も、驚いて動きが止まる。
「今ね！バンムーブ！」
智東さんが称山先生に放った。
「…!?動けない!?」
…どうやら称山先生は動けなくなったようだ。なるほど…今のうちに！
「逃がさないわよ！」
称山先生がまた銃を放った。
「エネルギーじゃないのが救いだな…っと。」
しかしそれを、赤海君は持ってきたペンを投げ、相殺させた。
「智東さん…ありがとう！」
僕と赤海君はドアを開けた。間もなく、宮内さんにもヘイストをかけたようで宮内さんと智東さんも来た。
「…長走先生…ごめんなさい。」
…なんとか、適正検査室から脱出することができた。
「…これからどうするのさ…」
僕は言った。
「どうするって…なぁ…」
「…オーダー…セブン…実行して…」
…称山先生の声だ。適正検査室から聞こえた。
「…なぁ、みんなも聞こえたよな？」
赤海君が言った。僕も、宮内さんと智東さんも頷く。

「おい…あれ!!」
急に赤海君が叫んだ。赤海君は、窓の外を見て驚いていた。
「いったいどしたの?…って…えっ…」
智東さんも窓の外を見て驚いている。いったい何が…僕も、窓の外を見てみた。
「何…これ…?」

新たな敵？

街が燃えていた。僕たちの住む、烏帽子宮市（えぼしみや）が、燃えていた。
「…」
皆、言葉を失っていた。見渡す限り…火の海だ。どこまで燃えているのかさえ、わからない。
「おい！学校が燃えてるぞ！」
そう聞こえたのは他の教室から。周りを見渡すと、確かに水場の方で火が燃えていた。
「どうにかしないと…」
そういったのは智東さん。すぐに火が出ているところに近寄り、
「ウォータフロウ！」
大量の水が出て、そこは何とか消火した。
「でも…なんで水屋から…？一番燃えにくい…はず…」
次に口を開いたのは意外にも宮内さん。
「だよな。水屋から出火するのはおかしい。そして街が燃えているのも…たぶん…」
と赤海君が言った。
「…オーダー、セブンかな。」
と僕が言った。皆静かに頷いた。
『校内のみなさん！校庭に避難してください！直ちに避難してください！５分後に防火シャッタを閉めます！
急いで避難してください！』
と放送が流れた。
「どうする…？今起こったことをみんなに話すか…僕は誰かにいち早く相談した方が良いと思うし、何より危険だから避難した方が良いと思う。」
「ああ、俺もその意見に賛成だな。」
「私も…賛成…です。」
「私も賛成だわ。長走先生の話によると、裏になんかでっかい組織が絡んでそうだしね…」

「よし。じゃ、とりあえず校庭に避難しよう。」
「そうはさせないね…オーダーセブンには、目撃者は逃がすな。というのも含まれているんだ。」
「「「!?」」」
　急に声がどこからか聞こえた。
「…ダークスピアー」
「マジックシールド!」
　急に黒いオーラをまとったような針が空中に現れたと思ったら、智東さんがシールドを展開した。
「あっ…あれ…」
　宮内さんが指さした先には人形があった。あれがまさか…?
「ごめん…シールドの維持で手一杯…相当強いわ…これ…」
　智東さんが苦しげな声で言う。
「だったら…さっきのを…」
　ダァン
　銃声が響き、人形は銃弾に貫かれた。そして、さっきまでこっちに飛んできていた黒いオーラをまとった針もなくなる。
「ふふふ…俺と同じ魔法使いか…戦うのが楽しみだ…」
　声は消えた。
「何だったんだ今の…?」
　と赤海君
「わからない…けど、たぶん称山先生の仲間。そしてオーダーセブンは、相当ヤバイ作戦のようね…」
　智東さんは言った。
「…ってまずい!防火シャッタ!」

　いや～…ハーメルンだと１０００文字以上じゃないといけないんですね。ってことでオマケ。

おしえて！智東さん！

Q．指輪の適正道具で魔法出すのってどんな感じ？

A．そうね。こう、念じたらボワァ～って出てくる感じだわ。

…本当にネタとかないので赦してください…

閉まってました

「あちゃー…やっぱ閉まってたか。」
　赤海君が呟く。そう、防火シャッタは閉まっていた。これだけの大火災ともなれば、すぐに閉まるのも当然であろう。
「どうする？これ。こじ開ける？」
　智東さんが物騒な言葉を言う。こんな子だったっけ…
「いや、それはやめた方がいいと思うよ…燃え広がると思うし。でもこのままここにいても危ないしなぁ…なんとかここから脱出して、かつグラウンドに避難しているであろう生徒と合流したいところだけど…」
　皆汗をかいていた。それはこの状況で学校に閉じ込められたことに対する汗か、それともこの火事の暑さによる汗か。…幸い、あまり煙は出ていないようだが。
「じゃ、窓から脱出する？閉めれば別に問題ないでしょ？浮遊魔法とか、皆にかけれるよ…たぶん」
　智東さんが有能すぎる。そして魔法もなんでそんなにポンポン使えるのか。適正道具の才能はとてもあったようだ。智東さんの「たぶん」は信頼できる。
「だったらそれで行くか…皆、それで良い？」
「…わかった。」
「おっけー。今その方法が最適かは俺にはわからないけど、学校から脱出できるなら、良いんじゃないか？」
「なら大丈夫だね…智東さん、お願い！」
「了解…フライ！」
　智東さんが皆に向かってそう唱えた。そうすると…浮ける。なんだろう、どう表現すれば良いのか分からないけど、空を飛べるような感覚がする。決して危険なクスリとかではない。
「皆窓から飛び降りて！」
「えっ…ちょっと怖い…分かってたけど…」
　と宮内さんが呟くも、皆飛び降りる。

フワッ…と、浮くような感じで、三階校舎から地面に着地した。
「人生で一番怖かった気がするわ…でもありがとう！智東さん！」
「へへ…沖原君にそう言ってもらえるなら…」
「君達」
!?前にいた人から急に話しかけられた。格好も先生のようではない。スーツ姿の、結構ハンサムな顔立ちの人だ。まさかまた敵が…と皆思ったようで、智東さんを初め全員が臨戦態勢だった。しかし…
「君達は『Ｔ４Ａ１』に狙われています。なので、こちらの方で保護します。」
平坦なしゃべり方の人だった。
「保護するって？」
最初に口を開いたのは赤海君。
「おっと…さすがに信用できませんよね…私わたくし、国家機関『攻撃適正保安委員会』の桜庭さくらばです。」
と、名刺を見せられた。今はとにかく緊急事態だ。信用するしかないか…
「皆ついてく？僕は緊急事態だしついて行こうと思うんだけど…」
と、小声で相談する。
「先生心配しないかな？」
と智東さん。
「あとで連絡すればダイジョーブダイジョーブ」
と赤海君。まぁ、僕も後で連絡すれば大丈夫だと思う。
「…私も、ついて行った方が良いと思う…嘘をついているようには見えない…」
と宮内さん。
「ＯＫ。じゃぁ…お願いします。私たちも今まで危険な目に遭ってきたので、保護してもらいたいです。」
「了解しました。まぁ、同意されなくても強引に保護するつもりでしたが…」
「え？」
「いえ…コホン。では、私についてきてください。」

と、桜庭さんが歩き始めたので、僕らもついて行った。

アマンダ

「ここです。」
桜庭さんに連れてこられたのは、地下へと続く階段だった。周りの建造物が炎に包まれている中、僕たちはここまで歩いてきたのだが…
「地下に何かあるんですか!?」
智東さんはこういった秘密基地的なものが大好きなようで…目をキラキラ輝かせている。もうちょっと緊張感を持った方が良いと思うけど…
「まぁ…そうなるかもしれません。とにかく、ついてきてください。」
と、僕たちはこの階段を下りた。そしてそこには赤いドアが一つ。
桜庭さんが鍵でそのドアを開けると、その部屋は無地の壁と床の、何の家具もない部屋だった。ただ…
「これはなんですか?」
と智東さんが真っ先に質問する。そう、床に魔法陣のようなものが書かれていた。
「これでワープするんですよ。みなさん、この魔法陣の上に立ってください。」
「大丈夫?」と赤海君が質問する。
「大丈夫です。私を信じてください。」
皆桜庭さんを信じてその魔法陣の上に乗った。そして…
「ワープ」
と桜庭さんが唱えると辺りが光りはじめた。
「なにこれ!すごい!」
と声を上げたのは智東さん。僕は結構怖いのだが…宮内さんも怖いのか、おどおどしている。
「大丈夫か…」

「着きました。では、案内しますので、私についてきてください。」
そうして着いたのは、また下に魔法陣があって、さっきの部屋と一

見同じような部屋だ。だが、目の前にあるドアの色は青色だ。
「ここは？」
と僕は質問する。
「ここは攻撃適正保安委員会、烏帽子宮支部です。この烏帽子宮の町は適正道具カリキュラムがある彼埜高校があるので、この委員会が置かれています。一般には公表されていないので、あなた方も知らなかったはずです。」
と桜庭さん。
確かに…烏帽子宮にそんな施設が、そんな委員会があるなんて知らなかった。
「でも窓もありませんし、まったく暑くもない…ってことは地下ですか？ここ。」
と智東さん。
「ええ。この施設は地下にあります。安全性を高めるため、結構地下深くにあるんですよ。」
「ロマン…！」
うん。智東さんならそう言うと思った。
「ちょっとお待ちください。」
と案内された場所にあるドアには「支部長室」と書かれていた。桜庭さんがドアをノックして中に入る。
「何だろうね…」
と宮内さんが呟く。
「さぁ…これからこの委員会に保護してもらうわけだし、挨拶とかじゃない？」
と赤海君。
「こんなロマン溢れる施設の長なんて、カリスマ性のある人かなぁ？」
と智東さんが目を輝かせながら言う。
しばらくして、桜庭さんが出てきた。
「大丈夫なようです。皆さん、この部屋にお入りください。」
「はい…失礼します。」
と僕が一番先に部屋に入り、後に続きみんな入った。

その部屋もコンクリート張りの部屋だったが、壁際に本棚があり、そして何より、目の前に大きな机と大きなイスがあった。
そしてそこに座っていたのは…
「やぁやぁ！君たちが『Ｔ４Ａ１』に狙われたっていう、彼埜高校の生徒さん達かい？まぁ、そんな緊張せず、そこの椅子に掛けたまえ～！」
ええ…。彼女を形容する言葉と言ったら「ロリ」だとか「幼女」だとかしか浮かんでこないような女の子だった。大きなイスと机には不釣り合いだ。まぁ、一番驚いていたのは、僕ではなく智東さんのようだが。
目の前にいる少女は、金髪で、黄色い目をしていた。かわいい。
「君たちが狙われている以上、私がここで保護するからな！安心したまえ！私はこの攻撃適正保安委員会、烏帽子宮支部長の上山（かみのやま）アマンダだ！これからよろしくな！」
「アマンダって…ハーフ？」
と赤海君。
「そうだ！英国の方の母を持っている！」
と上山さんは答えた。
「これからよろしくお願いします！アマンダさん！」
と言ったのは智東さんだった。さすがに打ち解けるのが早いなぁ…
「おう！こちらこそよろしくな！」
それにしても上山さんはしゃべり方独特だなぁ…
「支部長、『Ｔ４Ａ１』の話をしておいた方が良いのでは？知っておいた方が、彼らにとっても得です。」
と桜庭さん。
「そうだな…君たち、重要な話だからよく聞いてほしい。君たちを狙った、攻撃適正を悪用している集団の話だ…。」
と、上山さんは急に真面目な口調になり、語り始めた…。

Ｔ４Ａ１

「Ｔ４Ａ１とは、最近この烏帽子宮を中心に活動している攻撃適正集団の事だ。まぁ、攻撃適正じゃないものもいるらしいが…不良集団だな。うん。」

と、まず上山さんから話された。

「アマンダ！質問！」

と智東さん。出会って数分程度なのに上山さんをアマンダ呼び（しかも呼び捨て）。僕には到底できないね。

「称山先生もそのＴ４Ａ１ってのに入ってたわけ？」

「ああ、そうだろう。長走も話そうとした、と桜庭から聞いたぞ。」

ん…？長走先生…？

「え!?長走先生を知ってるの!?」

一番最初に口にしたのはやっぱり智東さん。

「ああ。攻撃適正保安委員会のメンバーだ。最近は高校生もあのグループにいると聞いてな…それであの学校に送ったんだ…まさか…こんなことになるとは…」

と上山さんが言うと、全員が黙ってしまった。

「そういえば、私たちの戦闘を見ていたわけじゃないよね？なんでそんなことを知ってるの？」

と智東さんが数秒の沈黙の後言った。

「ああ、それは私の適正道具です。」

と桜庭さん。

「えっ!?桜庭さんの？」

と声にしたのは赤海君。

「ええ。私の適正道具はイヤホンです。周囲半径１００ｍから出ている音を拾えます。そしてその音のうち気になる音。つまり特定の部屋から出てる音などを限定して聞くことができます。それで、適正検査室で起こったことはほぼ把握しています。」

と桜庭さんが言った。

「ちなみにこいつは聖徳太子のようにいろんな音を聞き分けることが

できるぞ。」
　と上山さんから補足。それは適正道具の能力なのか、それとも本人の能力なのか…すげぇ。
　しかし一つ疑問点が
「桜庭さん、なんでその時学校にいたんですか？」
　と僕はその疑問を口に出した。
「長走から連絡を受けてな。まぁ、連絡と言っても君たちの想像しているような携帯や無線ではなくブザーのようなものだけどね。攻撃適正の生徒がいたら、すぐに言うのではなく、後で説明する。もしかしたらその時に、急に周囲を攻撃するかもしれないから私が一応その部屋の会話を聞くことになる。危険だったらいつでも増援を呼べるように。もっとも、いままで暴れだした生徒なんて一人もいなかったから、今回のような騒動が起きても私は何も対処できなかった…すまなかった…」
　と桜庭さん。
「対処しようともしなかったんですか？」
　と、宮内さんからのキツイ一言が飛ぶ。宮内さんは宮内さんで、智東さんと違うベクトルですごいと思う。
「いや、一応増援は呼んだんだがな…そいつらは地上の支部から来る。地下の支部にいるのはごくわずかだ。そして今回地上があんなことになってね…道が大混乱だったそうだ。もっと早くつけるようにするべきだったな…」
　と桜庭さん。
「いえ、あなたは何かしようとしなかったのですか？」
　とまた宮内さん。
「私は完全に後方支援タイプでね…行っても何の役にも立たず、無駄死にするだけだったと思う。でも、今は行っておくべきだったかもしれないと後悔しているよ…」
　と桜庭さんは悲しさと悔しさが混ざった表情で行った。
　また数秒の沈黙
「…話を続けて良いか？」

と上山さん。皆頷く。
「それでそのＴ４Ａ１の事だがな…分かっていないことが非常に多い。奴らは情報の隠蔽能力に非常に長けている。だが…」
「だが？」
と智東さん
「だが、重要な部分でひとつ分かっていることがある。それは、〝Ｔ４Ａ１〟という組織名だが…それは幹部の名字の頭となるアルファベットをとったものであるらしいということだ。」
ええ…。組織名がそんな簡単なもので良いのだろうかと思ってしまった。
「なるほど…それで、称山先生が幹部だとしたら…」
と僕が。
「…Ｔの一人だな。称山四季は、前から行動が怪しくてな…しかし、尻尾を掴めていなかった。恐らく、Ｔ４Ａ１の幹部だと思われる。桜庭から戦闘の詳細を聞いたが、称山はおそらくダブルツールだからな。幹部クラスの人間と言っても良い。」
ダブルツール？
「えっ…？ダブルツール…？」
と赤海君が聞いた。
「あぁ、ダブルツールというものは、二つの適正道具があるということだ。例えば、称山の場合は靴と銃だろうな。人より速い速度で動ける靴の適正と、エネルギー弾、というより魔法無視のような効果の弾だな。まぁ、そんな感じのものを放てる銃の適正と言ったところだろう。」
そんな人がこの世の中にいるのか…こえぇ…
「正直、Ｔ４Ａ１の幹部クラスがこんなやつばっかりだとすると、厄介だな…」
と上山さんがこぼす。
「まぁ…これからは私たちが君を保護する！安心したまえ！」
と、上山さんはあった時のような笑顔に戻って言った。

――――某所

「すみません、オーダーセブンの事を聞いた高校生４人を逃がしてしまいました…」

と私はモニター越しに報告する。

「ククク…まぁ良い。あやつらは面白そうだからな。殺すにはもったいない。」

「すみません…私にも奴らを逃がしてしまった責任があります…。」

新しく会話に入ってきたのは…称山か。

「称山は、いつもやり方が手荒すぎる…。もうちょっと様子を見てからでも良かったろうに。…今度失敗を犯したら、幹部でも容赦なく〝例の部屋〟行きだからな？」

とあの方はおっしゃった。

「ヒッ…こ…今度はもっと考えてから行動しますので…」

「…今度失敗したら、と言っておろうに。まぁ良い。これからが楽しみだわ…ククク。」

そう言って、あの方は通話を切られた。

番外編（人物紹介）

人物紹介

沖原郷（おきはらごう）（１５）

普通の高校生。烏帽子宮東中（えぼしみや）→彼埜（かの）高

髪は黒髪のショートで、顔は爽やかな美少年大プ。身長は約１６５ｃｍ。瞳の色は黒。

頭は悪くなく、彼埜高校へは普通に勉強して入った。

結構優柔不断なところがある。緊急事態になると内心パニックになるタイプ。

適正道具は刀（日本刀ｅｔｃ…）どんなに大きくても、どんなに重量があっても使いこなせる適正能力。

斧では発動しないらしい。

趣味は特にない。中学生の時から無趣味人間とか呼ばれている。

日下部快人（くさかべかいと）（１５）

郷の親友にして幼馴染。烏帽子宮東中→彼埜高

髪は黒のセミロングで、癖毛がある。顔は砂糖顔で、元気な少年のような印象を受ける。身長は約１７０ｃｍ。瞳の色は黒。

頭は悪い。彼埜高校へは鉛筆転がして出た数（鉛筆のそれぞれの面に数を割り振った）をマークシートでマークしたら入れた。

もちろん適正道具は鉛筆。各面に何かを割り振り（数字、言葉ｅｔｃ…）転がすと、その場面での答えを導き出すことができる。道に迷っても大丈夫。

趣味はネット。掲示板に書き込んだり、二〇動見たり…

智東さんのような人が好み。

智東香里奈（ちとうかりな）（１５）

いつでも明るい女子高生。冬月（ふゆつき）中→彼埜高

髪はショートカットの黒。顔はスポーツ系の元気な感じがする。

身長は約１５５ｃｍ。瞳の色は橙。

頭は良く、機転が利く。緊急事態などの時は誰よりもリーダーシップを発揮するタイプの人。

適正道具は指輪。別に宝石指輪でないとダメとかそういう縛りはないが、高価なものほど魔法の威力は上がるらしい。因みに長走先生の指輪はダイヤモンド。給料三ヶ月分。

いろいろな魔法を放つことができる。基本的に、魔法の効果等が自分の頭でわかっていて、その魔法の名前を自分の中で設定すれば放てるらしい。

趣味は同人制作。サークルに入っており、コミケではサークル参加している。満十八歳になるのを楽しみにしている。

宮内瑠璃（みやうちるり）（１５）

内気で静かな女子高生。烏帽子宮北中→彼埜高

髪は栗色のボブカットに、ハーフリムの赤いフレームのメガネをかけている。身長は約１５０ｃｍ。瞳の色は紺っぽい青。

ここぞという時の集中力は凄まじい。普段からポーカーフェイス。ちなみに笑うととても可愛い。

適正道具はおもちゃ。おもちゃを本物にすることができる。例としては、ＢＢガンを本物の銃にできたり。

ちなみに、適正検査室での対称山先生戦のときの「長走先生のバッグに入ってた銃」は実銃。

趣味は読書。好きな著者は森博嗣で、今まで同作者のいろいろな本を読んできた。

また、裏の趣味としてミリタリー好きでもある。部屋にはモデルガンやプラモデルがたくさんあるとか。

赤海柊平（あかみしゅうへい）（１５）

気さくで明るい高校生。瑞宮（みずみや）三中→彼埜高

髪は赤色で、長めのウルフカットが特徴的。顔はキリッとした顔立ちで、身長は約１７０ｃｍ。瞳の色は赤。

呑み込みが早く、要領が良い。ムードメーカー的な存在でもある。

適正道具は棒状のもの。アバウトだが、棒状のものなら何でも適性がある。棒状のものを、高速で投げることができる。その速度はアサルトライフル並み。また、小さいモーションで投げることができ、投げる間隔を短くすることが可能。

趣味は写真。風景から人物まで、いろんなものの写真を撮ることが好き。愛用の一眼レフは未だフィルムカメラ。

称山四季（たたえやましき）（２３）

おっとりとした感じの先生。独身。彼埜高のＯＧであり、長走先生とは同級生だった。

髪は栗色のふわふわした感じのセミロングで、顔は少し童顔っぽい。身長は約１５０ｃｍ。瞳の色は黄。

彼埜高で教師をしている反面、裏ではＴ４Ａ１の幹部でいろいろな悪事に手を染めている。

また、普段のおっとりとした感じとは裏腹に、人を普通に銃で撃つ冷酷な性格でもある。（二重人格というわけではない。）

二つの適正道具を持つ（ダブルツール）。一つは銃で、魔法無視のエネルギー弾を放つことができる。弾丸が無くても撃つことが可能。もう一つは靴で、常人の何倍もの速度で動ける。本気を出すと瞬間移動ぐらいの速さでの移動が可能。

趣味は絵を描くこと…だが、最近はあまり描いていないらしい。

担当教科は国語

長走茜（ながばしりあかね）（２３）

しっかり者の先生。既婚者。彼埜高のＯＧであり、称山先生とは同級生だった。

髪は金髪のショートではねっ毛や癖毛がある。本人曰く「髪型にはあまりこだわっていない」とのこと。顔は端正な顔立ちで、女性的。身長は約１６０ｃｍ。瞳の色は薄い黄。

彼埜高校で教師をしながら、攻撃適正保安委員会にも所属している。

コミュニケーションは少し苦手で、「あ～」とか「え～」とかを、言葉の最初に付ける癖がある。

適正道具は包帯で、包帯で巻いたところを一瞬で治癒させる能力を持つ。しかし、死人の治癒は不可能。

趣味はプログラミング。趣味程度だが、ゲームを作ったりしている。

担当教科は適正道具
桜庭春彦（さくらばはるひこ）（２７）
攻撃適正保安委員会烏帽子宮支部のメンバー。独身。
髪は黒のオールバック。顔は鋭い目が特徴的。身長は約１８０ｃｍ。瞳の色は黒。
平坦なしゃべり方で、無表情な人。冷静な決断ができる人だが、少し抜けているところがある。
適正道具はイヤホンで、周囲半径１００ｍから出ている音を拾えて、そしてその音のうち気になる音（特定の部屋から出てる音など）を限定して聞くことができる。ちなみに、聖徳太子のようにたくさんの音を聞き分けられるのは、イヤホンをつけている時だけ。（つまり適正能力の一つ。）
上山（かみのやま）アマンダ（２５）
攻撃適正保安委員会烏帽子宮支部支部長。独身。
髪は金髪のふわふわした超ロングで、腰までである。顔は童顔で、年齢が１０歳と言われても違和感がない。ロリ。身長は約１３５ｃｍ。瞳の色は黄。イギリス人の日本人のハーフ。
喋り方が特徴的で、どんな人ともすぐ打ち解けることができる。リーダーシップがあり、部下をまとめることが得意。
適正道具はチョークで、魔法陣を描くことができる。智東さんと同じで、魔法の効果等が頭の中で分かっていて、その魔法陣を設定し、描くことで魔法の発動が可能。道具がチョーク故に、空中に書くことはできないが、トラップやワープなどに便利な適正能力である。

非日常の中の日常

烏帽子宮地下支部にある、ベッドの寝心地はとてもよかった。
いや、寝心地が良かったのかはわからない。昨日はとても疲れていたからかもしれない。
彼埜高校に入学して、二日目でこんな大波乱に巻き込まれたのだ。
班の皆が攻撃適正を持っていたり、先生が実は闇のグループの幹部だったり、烏帽子宮市が燃えたり…
大変な一日だった。っていうかみんなの精神力凄すぎだろ。こんな出来事が起こったら普通はＳＡＮ値葬コースだわ。
ちなみに全員が個室で寝ることができた。

「おはよ～」
とドアを開け、まだ眠そうな瞼をこすって挨拶したのは智東さん。明日の朝は個室の近くにある、「談話室」に集まろうと決めていたのだ。私は二番目で、一番早く来ていたのは宮内さんだったようだ。いつもの難しそうな本を読んでいる。
「ね～、宮内さん。その難しそうな本、面白いの？」
と智東さんは眠そうな声で聞く。若干寝ぼけているようだ。いや、僕と同じで昨日の一件もあって疲れているのか。
「あ…おもしろいですよ？この作者の本はとても…この本は大学の実験施設で密室殺人事件が起きるという話でですね…」
と、宮内さんはどこか嬉しそうに話した。
「へー…それって確か、犯人は○○と○○（自主規制）じゃないっけ？」
と智東さんが言う。いや、宮内さんが読んでるのにそれは言っちゃダメだろ…
「え…？なんで知ってるの？読んだことあるの!?」
といつもの宮内さんとは全く違う様子で嬉しそうに智東さんに話しかけてくる。
「ああ…うん。そのシリーズは一応…。それ、一作目がアニメ化されたでしょ？それの原作読んで、なかなか面白いなー…って。」

智東さんもなんか驚いてるというか、半分引いているような感じである。
「ですよね！このシリーズ面白いですよね！」
宮内さんはとてもテンションが上がっている。こんな宮内さんは初めて見た。
「皆おはよー！」
赤海君が元気に部屋に入ってきた。
「お、全員揃ってるね。そして宮内さんのそのテンションは何…」
赤海君も困惑。
「なんか宮内さんの読んでいる本を智東さんも読んでる、って分かったらあんなにテンションが上がって…」
と僕が説明する。
「あー…なるほどね。ああいうタイプの子は、自分と同じ趣味を持ってる人見つけると、あんな感じになるよね。分かるわ。」
と赤海君はちょっと苦笑いしたような感じで言った。
「で、ですね！私は一作目はこのキャラがこのセリフを言うところが最高に良いと…」
「皆…コーヒー飲む？」
と、智東さんは宮内さん話を切って答えを聞く前に談話室に置いてあるコーヒーメーカーの所へ行った。
「あ…ちょっと待ってください！まだ話したいことが…！」
と宮内さんは引き止めた。しかし、智東さんは戻らない。
「ではコーヒーを飲みながら話をしましょう！」
「宮内さんってこんな感じだったっけ…？」
と赤海君が呟いた。

非日常の現実

智東さんの淹れてくれたコーヒーはおいしかった。
僕は砂糖は入れないタイプだが、宮内さんとかは結構入れていた。
「ねぇ、宮内さんの読んでるその小説の登場人物って、コーヒーに砂糖は入れないタイプじゃないっけ？」
と智東さんが聞いた。うんざりするくらい話を聞かされても、こういう質問をするあたり、智東さんは良い子だと思う。
「…それはそれ、これはこれです。」
と宮内さん。ブラックは苦手か…
「テレビ点けていい？」
と赤海君。
「良いよ～。」
と僕と智東さんは言った。宮内さんは本を読みながら頷く。
『昨日烏帽子宮市を襲った謎の大火は、未だ出火元が分かっていません。現在のところ、死者数・行方不明者数は３０００人ほどと推測されており…』
「急に現実に引き戻された気分だね…大惨事だったんだな。やっぱり…」
と赤海君。
「…学校の皆、無事かな？」
と智東さんは心配そうな表情で言う。。
「皆ちゃんと校庭に避難できてたし、大丈夫だと思うけど…」
と僕は言った。
「っていうか、Ｔ４Ａ１絡みの事件でしょ？称山先生がオーダー…なんだっけ？」
「…セブン」
と智東さんが話しているところで、宮内さんが補足した。
「そう、それ。称山先生がＴ４Ａ１の幹部なら、たぶん指示したのは称山先生で、実行したのはＴ４Ａ１でしょ？」
「だろうね…」

と僕と赤海君は智東さんの考えに同意した。
「皆揃っているな…おはよう。」
と急に声をかけられる。この声は上山さん…アマンダの声だ。しかし、昨日の声と比べ、とても暗い。
「どうしたの？アマンダ？」
と智東さんが声をかける。
「皆の親なのだがな…すまないが、連絡が付かなかった。」
と上山さんが申し訳なさそうに言う。
「覚悟はしてたけど…やっぱりそうだったのね…」
と、智東さんは涙ぐんだ。
「私…ちゃんとした親孝行できてないのに…」
「いや、まだ死が確定したというわけではない。携帯を置いてった可能性だってあるしな…なんとか私たちも探してみる。私が言うのもなんだが、0%と1%では天と地の差がある。確率があるのと無いのとでは大違いだ。きっと君たちの両親は生きているさ。」
と、上山さんが慰めるように言う。
「あとだな、彼埜高校の皆は無事だ。あそこの職員はなかなか優秀だな…一人の犠牲者も出さず、グラウンドに避難させることができたらしい。高校の方にも、君たちを保護したことは連絡しておいた。」
と、上山さんは付け加えていった。
「ありがとうございます」
と僕は言った。
「礼には及ばない。当然の義務だ。」
と上山さん。
「あと…上山さん、いつもの調子に戻ってくれませんか？その方が…僕らとしても気が楽です。」
と僕は言った。
「お…おう。そうか。まぁ、ここは安全だ。ちょっと問題が一段落するまで、安心してここで生活していてくれ！」
と、いつもの元気な口調と笑顔に戻って、上山さんは言った。

1章終話

そこから一週間ほど、僕たちは攻撃適正保安委員会の烏帽子宮支部暮らした。
皆で一緒に生活もしているし、なんだか寮の様な気分だった。しかし、この日常は大きな非日常の中にあるもので、皆の心の疲労もだんだん溜まっているようだ。
そもそも…こんなことに巻き込まれて皆正気なのが凄いと思うけどね…。
そんなある日のこと…
「皆、非常に残念なニュースなのだが…」
と上山さんが談話室に集まってテレビを見ている僕たちに話しかけてきた。
僕はそう話しかけられたとき、色々な考えが頭の中に浮かんだ。
やっぱり…快人が心配だ。先週、彼埜高校の皆は無事だと言われたけど…
「Ｔ４Ａ１が新たな武器を開発したのだ。」
「武器…ですか？新しいタイプの銃とか？」
と智東さんが聞く。
「いや…これまでの歴史で今まで誰もが開発できなかった武器だ。だから私たちもこれからの対策に非常に困ることになるのだが…話しても良いだろうか？」
「ええ。良いですよ。その方が僕たちも対策って言うか…聞いておくだけでも良いですし。」
と僕が返した。
「うむ…。それはだな…『魔法』だ。」
「魔法？それなら私も使えるけど…」
と智東さん。
「ああ。普通の『適正能力としての魔法使い』ならＴ４Ａ１にも何人かいるのだがな…」
「適正能力としての…ってことはまさか!?」

と赤海君。僕も赤海君と全く同じ心境だ。まさか…
「…あぁ。誰でも魔法が使えるようになる、『インスタントマジック』を開発したのだ。」
「…それは全員に魔法を使う能力が身につくということ…？」
と宮内さんが聞いた。
「能力を身に着けるというわけではなくだな。紙に魔法の能力があって、それを使うと魔法が使えるようなのだが…私にもよく分かっていないのだ。」
そういえばＴ４Ａ１は情報隠蔽が得意だったな…
「ではなぜインスタントマジックの事がわかったのですか？」
と僕が聞いた。
「実は部下がこれを使われたようで…その部下が何とか生き残ってな。彼が話してくれたんだ。なんでも、手帳のような物から紙をちぎりとったと思ったら、急に火が出てきたらしい。」
何だそれ…その手帳（？）を全員が持ってるとしたら相当大変なことじゃないか…？これ。
っていうかそもそも…
「いつの間にそんな戦闘が起こってるんですか…!?」
と智東さんが聞いた。
そういえばそうだ。「何とか生き残った」ってことはすでにＴ４Ａ１の間との戦闘で死者が…？
「君達が聞いたオーダーセブンとやらがきっかけだと思うが、Ｔ４Ａ１が急に活発に動き始めて…烏帽子宮市は町全体が燃えているし、住民も避難できる人は避難したのだが、その中で攻撃適正保安委員会とＴ４Ａ１の戦闘が烏帽子宮市で起こっているんだ…もしかしたらここにも危険が…。」

特訓

「そんな大変な事態に発展しているのなら…私たちも戦います！そんな…これ以上犠牲者を増やしたくない…」

と一番最初に言い出したのは智東さんだったか。僕達も、智東さんがそう考えている事を聞いた時には驚いた。確かにこれ以上犠牲者も出したくないし、僕達の住む烏帽子宮市も守りたい。けど命も危険もある…。その事を僕たちは最初に桜庭さんに相談した。

「正気か…？Ｔ４Ａ１はほぼみんな攻撃適正持ちと思ってもらって良い。いくら君達が攻撃適正持ちと言っても、戦闘に参加するのは…。命も危ないし、まだ高校一年生。適正道具カリキュラムも受けていないんだろう？ならもっと危険だ。」

と、桜庭さんが「お前ら正気か？」と言うような顔で言った。

心なしか、桜庭さんの話し方も前より若干砕けた気がする。

「それでも…私たちは…支援だけでも…」

と智東さんは言う。智東さんは困ってる人を放っておけないタイプだ。自分より他人を優先するような人であるかもしれない。

「駄目だ。危険すぎる…だが、この支部にもＴ４Ａ１が攻め込んでくる可能性がある。ならば…」

そこで、桜庭さんが少し笑ったような気がした。

「俺から適正道具、攻撃適正のカリキュラムを受けるか？」

「良いんですか!?」

と智東さんが目を輝かせた。魔法を使いたいだけってことは…無いよね…？

「ああ。あくまで護身のためだ。戦闘には参加させないぞ。」

ここから…桜庭さんの特訓が始まった。

――――「そこ、もっとモーションを小さくだ。」

烏帽子宮支部のさらに地下、いつも暮らしているところがＢ１階だと仮定すると、Ｂ２階には的のほかにいろいろな道具がある総合訓練場が広がっていた。

「間隔も短くだ。お前の適正能力なら、もっと短くできるはずだぞ?」
呼び方も「君」から「お前」に変わっている。…まさに特訓だ。
今は赤海君が特訓されている。的に向かって飛ばしているのは訓練用の棒だ。…何製?
「はぁ…はぁ…」
赤海君も相当疲れている。適正能力を使うと結構疲れる。桜庭さんいわく、「慣れたり訓練したりしているうちに、能力を使ってもあまり疲れを感じなくなる」ということだったが…
「桜庭さん…ちょっと休憩…」
赤海君がこういったことを言うのも珍しい。僕、宮内さん、智東さんの三人は部屋の隅の方でその訓練を見ていた。
「まぁ…最初はこんなものか。適正道具カリキュラムを一回も受けていない身にしては結構良かったぞ。」
と桜庭さんは少し笑顔になり言った。
「さぁ次…沖原だ。」

特訓（沖原君の場合）

「沖原の適正道具は確か…刀だったか。」
　と桜庭さんから聞かれる。
「はい。」
　と僕は答えた。
「刃物なら基本的に適性があるから…日本刀以外でも大丈夫なのだな？」
「たぶん…」
「で、適正能力はどんなに大きく、重い刀でも自由自在に扱えると…まぁ、凄いと言えば凄いが…使い勝手が悪い能力だな。大きな刀が自在に扱えるといえば聞こえはいいが、狭い所で大きな刀なんぞ使っても意味はないどころか逆効果だしな…」
「なんかすみません…」
「いや、謝ることはない。剣術の基本から教えよう。まずだな…」
　そう言われて手渡されたのは、竹刀だ。なんというか…予想通り？
「さぁ、基本練習だ。素振りから！」
　と桜庭さんがさっき赤海君を特訓していた時のような声で言った。

「よし。まぁ、まだまだではあるが…剣術の訓練は今日はそのくらいで良いだろう。だんだんできるようになっていけば良いしな…」
　…桜庭さん、そのくらいで良いって…二時間近く…ハードな…
「さぁ、適正道具の訓練はこれからだ。俺について来い。智東と宮内と赤海もだ。」
「はい。」
　と皆は返事してついて行った。僕も赤海君たちに合流した。
「沖原お前…大丈夫か？かなりハードそうだったぞ？」
「大丈夫大丈夫…これでも中学時代に鬼のような顧問から結構しごかれたんだから…」

「…中学の時何部？」
「…卓球部。」
…と少々赤海君と雑談している間に（その時、宮内さんと智東さんもこれからどのような特訓を受けるのかについて怖さ交じりに話していたが）広い何もない部屋に出た。天井も高い。壁もさっきの訓練場と変わらず、コンクリート張りだ。
「これはとある適正能力持ちの職人が作った刀でな…見た目は普通の日本刀のレプリカだが…、赤海、ちょっと持ってみるか？」
と刀は赤海君に手渡される。
「…重！」
そう言って赤海君は刀を床に落とした。刀が床に落ちた時も大きな音（どうやら金属音ではないようだが）がして、その刀の重さを物語っていた。
「そう…この刀のレプリカは、重さはなんと２０キロだ。」
２０キロ…？１０キロのコメ袋二袋分…!?
「え…桜庭さん、これを私が持てと？」
「あぁ、そうだ。お前なら持てるはずだ。」
本当かなぁ…
そう思いながら、僕は桜庭さんから手渡された刀を持ってみた。
「あれ…？普通の重さじゃないですか。むしろ、さっきの竹刀ぐらい軽いですよ？」
「そう…それが君の適正能力だ。どんなに重く、大きい刀でも簡単に扱うことができる。」
これが僕の適正能力…初めて適正能力というものを体で感じた。なんかこう…拍子抜けな感じもするけど…
「さて…大変なのはこれからだぞ？」
と桜庭さんは言った。

重い

「…桜庭さん…これめっちゃ重いんですけど…」
…重い。さっきまであんなに軽かった刀が鉛のように重い。それにかなり疲れた。どのくらい疲れたかと言うと、中学校の頃に経験した３０００ｍ走を全力で走った時ぐらい疲れた。
「…１５分か。まぁ、初めてにしては良いんじゃないか？それに、刀を手放していない所を見ると一応適正能力は発動しているみたいだしな。」
と桜庭さんは言う。さっき赤海君があんなに疲れていたのと、桜庭さんが「大変なのはこれからだぞ？」って言ってたのはこれか…
「…刀置いていいですか？」
「駄目だ。せめて３０分経過するぐらいまで耐えろ。」
と桜庭さんは厳しめの口調で言った。
「３０分て…沖原もあんなに疲れてるのに、桜庭さんも鬼だな…」
と赤海君が呟いたのが聞こえてきた。そっちをチラッと見ると、宮内さんと智東さんも頷きつつ何か話していた。
「さ、頑張れ。」
と桜庭さんが言った。

「も…無理…」
僕は刀を手放し、地面に倒れ込んだ。
「沖原君！」
と智東さんが駆け寄ってくる。
「僕は大丈夫…」
気を失ってはいないが、疲れた。寝たい。猛烈に寝たい。
「３０分、耐えたな。よくやったぞ、沖原。」
と桜庭さんが声をかけてくれた。僕も眠気を抑えながら、仰向けの状態に移行した。

「そして、他の者にも説明したいのが今の沖原の状態に関することだ。」
　僕はこの説明のためだけに３０分間適正能力を使わされたわけじゃないよね？
「さっきの赤海もそうだが、適正能力を使っていると疲労がたまってくる。しかし適正道具も人それぞれだから、疲労の溜まり方も人それぞれだ。例えば沖原は刀だから、持っているだけで能力発動。即ち、刀を持っているだけで疲労がたまるということだな。」
　と一通り説明して、桜庭さんは次に赤海君を指した。
「赤海は投げるたびに能力を発動するから、投げるたびに疲労がたまる。持っているだけでは能力は発動されないから、持っている分には疲れないぞ。」
「なるほど…了解です。」
　と桜庭さんの説明に赤海君は答えた。そして、次に宮内さんを指す。
「宮内は、確か適正道具が玩具で、玩具をを実物にする能力だったな？この能力だと、玩具を実物にしている間はずっと疲労がたまり続けるから注意だ。」
「はい…分かりました。」
　と宮内さんも答える。そして次はやはり智東さんを指す。
「智東は確か適正道具が指輪で能力が魔法…ならば、魔法を発動している間はずっと疲労がたまるだろうから注意だな。」
「分かりました。」
　と智東さんは答えた。
「そして、この疲労というものは身体的な疲労とは直結しないようで…この辺はまだあまり研究が進んでいなくてすまないが、適正能力による疲労は他の疲労、例えばさっきも言ったように身体的な疲労や精神的な疲労とは関係ない。つまり、適正能力を使ったときだけに感じる特有の疲れだな。もっとも、感じ方は身体的な疲労と同じようだが…」
　と言い終えた後、僕を指した。

「このように適正能力を長時間使うとこの疲労が溜まり、最悪気絶するようだ。沖原の場合はもうちょっと長くやってたら気絶していたかもしれないな。」
マジかよ…
「この気絶するまでの時間、つまりは疲労の限界は、適正能力を使っているうちにだんだん上がってくるようだ。つまりこの特訓は、適正能力を強化するほかに適正能力を長く使えるようにする特訓でもある。」
と桜庭さんは言い終えた後、
「ちなみにさっきから言っているが、身体的な疲労とは関係ないから基礎体力トレーニング等をしても無意味らしいぞ。」
と補足した。
「さて…次は智東だ。」

再会？

次は智東さんか…と思い、名前を呼ばれ智東さんも立ち上がったところで一人の男が部屋に入ってきた。
「桜庭さん！」
と男が言う。
「どうした？緊急事態か？」
と桜庭さんは落ち着いた声で言うものの、顔に少し焦りが出ているように見える。
「彼埜高校から生徒が一人…」
「ここに来たのか？」
「ええ。先ほど…。長走さんが教えたようですが…後をつけられているか確認した方が良いですか？」
「指示されずともそのくらいはやっておけ。」
と桜庭さんは少々厳しい口調で言った。
「はい…すみませんでした。以後このようなことないように気を付けます。」
「で、その生徒はどこに？」
「はい。少し怪我もあったようなので、医務室に連れて行きました。」
「分かった。すぐ行く。」
と桜庭さんは歩いて行こうとしたが、少し行ったところで振り返り、
「もしかしたら君達が知っている生徒かもしれない。ついてくるか？」
と桜庭さんが聞いた。
「はい！ついて行きます！」
と智東さんが答えた。やはり気になるらしい。
「他の三人もか？」
と桜庭さんに聞かれ、
「はい。」
と三人は声を合わせて答えた。

医務室まで移動する中…
「なぁ、彼埜校から逃げてきたって…誰だと思う？」
と赤海君に聞かれた。
「さぁ…同級生かな？でも自分たち以外校舎にいなかったような気はするけどなぁ…」
と僕が答えた。
「ねぇ、今の学校の状況とか聞くの楽しみじゃない？」
と智東さん。なんだろう…智東さんはいつも何かがずれている気がする。
「楽しみ…って表現は適切ではない気がするけど、確かに今学校がどうなっているのかっていうところに興味はあるね。ってかＴ４Ａ１に攻められたのか…？」
と赤海君。
「さぁ…」
と僕は気のない返事をしながらも、学校にいるであろう日下部快人の事を心配していた。
あいつは攻撃適正を持っているわけでもないだろうし、体術とかできなそうだし…
「ついたぞ。ここが医務室だ。ちょっとドアの前で待ってろ。」
と、桜庭さんがドアの中に入っていった。
「僕は快人が心配だな…」
と言った。すると
「あぁ、あの朝に一緒に登校した友達？学校においてきた友人が心配なのは私も分かるよ…」
と智東さんが言った。
「…私も、烏帽子宮北中の皆が…心配。」
と宮内さんが少し涙目で話した。
「…そうか、俺らの母校、烏帽子宮東中も燃えたかもしれないってことだな…」
と赤海君は言った。烏帽子宮市が燃えたってことは…そうなるか。
「よし。君たち、入って良いぞ。」

そういえば桜庭さんはいつの間にか君達呼びに戻ってるなーと思いつつ保健室に入ると…

「「お前は！」」

再会

「そのいかにも頭の悪そうな雰囲気を出している感じは！」
「そのいかにも無趣味って雰囲気を出している感じは！」
「快人だな!?」「郷だな!?」
「…仲良いなお前ら」
　と赤海君のツッコミが入る。
　そう、医務室のベッドで横たわっていたのは紛れもなく私の親友、日下部快人であった。
　そしてさっきから気になっていてどうしても知りたかったことが一つ…
「長走先生は無事だったのか!?」
「ああ。あの魔法陣？みたいなところも長走先生から教えてもらったんだ。ってか、ピンピンしてたぞ？長走先生。」
　良かった…長走先生は無事だったのか…。でもピンピンしてたって…？あの時確かに腹部を打ち抜かれていたはず。そして…
「長走先生に会ったってことは適正道具検査室に行ったのか？」
「ああ。避難の指令が出たときちょっと…トイレに居てな。遅れちまったから、適正検査室に誰かいないかなーと思って行ったんだ。そこに長走先生がいたぞ。」
　と快人はちょっと恥ずかしそうな顔で言う。なるほど、大か。
「そこに称山先生はいなかったか？」
「いなかったぞ？」
　という事は称山先生はあの後逃げたか…？
「ってよりその時ここを教えてもらったならここまで来る間何をしていたんだ？」
「まぁ両親とか心配になってさ…燃え盛る街の中、指定の避難所まで行ってきたんだぜ？で、そこで家族を見つけて、まぁちょっと数泊してだな…。長走先生から言われたことを思い出してここに来た。傷はその時のもんだな。」
　長走先生がこの場所を教えた意味とは…って避難所まで行ってき

た…？ってことは…
「快人！他の皆の両親はいたか!?」
「他の皆て…俺はお前の後ろにいる人たちとは約一名を除いて初対面だぞ。あ、でもお前の親はいた。」僕の親は無事だったか…良かった。そういえば、赤海たちとは初対面か…そっか忘れてた。とそこに…
「やぁ桜庭。うちの生徒を色々とありがとうな。」
と医務室のドアが開いた。あれは…長走先生!?
「長走先生！生きてたんですね!!」
と智東さん。
「あぁ。まぁ、私の適正道具は包帯…どんな傷でも治せる能力だからな。まぁあの程度じゃ死にはしないさ。」
「あれ？適正道具検査室は燃えてなかったの？」
「燃えてないな。あそこには水場がないからな…」
ん？水場がない？それが火事とどう関係が？
「それにしても称山の奴…私の適正能力を知ってるはずなのに、止めを刺していかないとは相当焦っていたな。」
「あれ？なんで称山先生が長走先生の適正能力を知ってるの？」
「あー…。それがな、元クラスメイトだったんだ。」
「「マジで!?」」
と宮内さん以外の三人の声が重なる。まさかクラスメイトだったとは…
「…で、今まで何をしていた。」
と桜庭さんが聞いた。
「ああ…それはだな…」

横の浜川から立つ優れた勝利の煙

「彼埜高校の横、浜川は知っているな？」
　長走先生の話はここから始まった。
「はい！知ってます。河川敷で少年たちが野球をしているのを結構見ますね。」
　と智東さん。
「恐らく、そこが火災の原因だ。」
「「え⁉」」
　と皆が声を合わせた。
「それはまた…何でです？」
　と僕が聞く。すると…
「あー…推測だが、変質系の能力者の仕業だろう。」
「変質者？」
　と智東さんが聞き返す。断じてそれはないと思う。いや、ない。
「変質系の能力者とはだな…適正道具によって適正能力は人それぞれ違うだろう？適正能力の中でも区分が別れているんだ。変質系の能力者は、その名の通り道具によって対象物の性質を変化させる。…ってまさか？そんな能力者が⁉」
　と、桜庭さんが補足説明をしている途中で急に驚き始めた。いったいどういう事なんだ…
「…恐らくお前が思っている通りだ。水を可燃性に変化させたのではないかと思うんだ…」
「なるほど…そうなると水場で被害が集中した説明がつくな…」
「あのー…その、水だとしたら、なんでここには被害がないんでしょう？」
　と桜庭さんと長走先生が会話しているところに智東さんが聞く。
「この地下支部はもしもにもしもを重ねた設備が揃っていてな…水道も貯水タンクから独自で引いているんだ。」
　なるほど…
「桜庭…これはなかなかに問題ではないか？これほどの規模で性質を

変えるとなるとかなりの能力者だと思うのだが…」
「まだ水が原因とは決まったわけではないがな。確かに、水か原因だとするとこれはかなり…」
「かなりの能力者って、能力に強いも弱いもあるの？」
　とまた智東さん。
「そりゃあるだろう。適正道具といえど、本人の適正能力が弱くては使い物にならない。そして、これほどの規模の水質変化は相当な能力者だと思われる、ってことだ。」
　…なるほど。うん？
「待ってください。なんで川って分かったんですか？水質変化や着火ならいろいろなところでできるはず…」
　と僕は聞いた。
「あー…それを説明していなかったな。浜川で一番最初に煙が上がったと攻撃適正保安委員の一人から連絡があったんだ。そこから着火したと思われる。」
「なんでその保安委員は都合よく浜川にいたんです？」
「浜川の近くに攻撃適正保安委員会烏帽子宮支部の地上支部があるんだ。支部内は煙草厳禁だから、吸いに行くやつは良く浜川に行く。それで見たんだろう。そしてその時に大きな声が聞こえたそうだ。」
「保安委員よ。これが勝利の煙だ。ってな。」

平等

「烏帽子宮は燃えているか。」
「マスター、どっかの独裁者みたいなことをおっしゃらないでください。」
まぁ、マスターも独裁者みたいなものかもしれないけど…と心の中で呟く。
俺の名は高宮尚典たかみやたかのり。Ｔ４Ａ１の幹部をやっている。
「それにしてもオーダーセブン…ずいぶん大きな作戦を実行させやがりましたね。称山は。」
「昔からあんな奴だ、称山は…。良く言えば決断力がある、悪く言えばすぐに作戦を発動させるからな…」
「今回の作戦発動は正直失敗ですかね？」
「作戦自体は失敗ではないが…称山の独断は失敗だな。もっと期を見てするべきだっただろう。それが〝奴ら〟を逃がさないためだけとは…」
「奴らを逃がさないためだけに実行したんですか？」
…まったく称山の野郎は。本当に…
「らしいぞ。この前称山本人から聞いた。そういえば…奴らは確か四人だったな？名前はなんだったか…」
「はい。えっと…沖原郷、宮内瑠璃、智東香里奈、赤海柊平の四人ですね。」
「そうそう…その四人だ。奴らはなかなか面白い。一クラス、しかも同じ班に攻撃適正が四人だ…。ぜひ我々の組織に入ってもらいたいところだが…」
「無理でしょうね…彼埜高校には長走がいます。長走が彼埜高校に赴任してきてから、Ｔ４Ａ１に入るものも減ってきております。」
「むぅ…長走が警告しているという事か？」
「いえ、そういうわけでもなさそうですね。今回称山が『長走がＴ４Ａ１の事について話そうとしたから』という理由で撃ってますし。」

「ではなぜ減ってきている…？長走が赴任してきてから。」
「恐らく、浜川の所以外にも保安委員の拠点があるかと。」
「なぜそう思う？」
「浜川の所でも我が組織と戦ってはいますが…浜川の所に潜入してるスパイからの報告によると、どうも浜川の所に長走がいないようです。奴は適正道具保安委員に入ってるはずなのに。」
「で、それがＴ４Ａ１への加入減少とどう関係するのだ？」
「この部隊が適正能力者の部隊とかだったらどうです？」
「…思考のコントロールか？まさかそんな…」
「あり得ますよ。この適正道具の世界なら…。こんな世界を変えるために私たちは動いているのではないのですか。」
　そう、俺達Ｔ４Ａ１の目的は適正道具のない世界。この世から適正道具はなくなれば、人は皆平等になれるであろう。そうすれば、きっと差別などのない社会に…
「そうだな。それではその別の拠点も調べていくか。社会を変えるぞ。」

適正道具のリスク

あれから…医務室での日下部との再会の後、特訓が再開された。日下部は念のためまだ医務室で療養するそうだ。
「さて、次は智東だ。」
と桜庭さんが呼ぶ。
「智東か…魔法系の能力だな。あと私の結婚指輪を返してくれないか。」
今回の特訓からは長走先生も一緒だ。
「あ…忘れてました。すみません、返しますね。」
と智東さんは長走先生に指輪を返す。
その時の長走先生の表情は、安心したような顔だった。相当仲が良い夫婦なのだろう。
「それでは、訓練用の指輪を渡す。」
と桜庭さん。
そうして智東さんに渡されたのは、…正直言って安物に見える指輪だ。まぁ、長走先生のはダイヤモンドもついてるし、それに見慣れたからだと思うけど…
「正直言って…いままでの長走の指輪だと魔法の威力が強すぎて智東にはちょっと危険だったんだ。」
そういえば桜庭さんは名字の呼び捨てで呼ぶなぁ…ちょっとかっこいい。
「どういうことです?」
「智東の適正道具は指輪、指輪によって魔法を発動させる能力だ。そしてだな、この指輪に使われている鉱物…宝石が希少であれば希少であるほど魔法の能力も高まるんだ。」
「でもダイヤモンドってそんなに希少じゃないって聞いた気が…」
「…正直そんなに良いダイヤではなかった。」
と長走先生が恥ずかしそうに言う。可愛かった。
「宝石の中では希少でなくとも、ダイヤ自体希少なことに変わりはない。ほとんど適正道具のカリキュラムを受けていない智東にダイヤ

を扱うのは少々危険なのだ。」
「適正能力が本人の限界を超えるとどうなるんですか？」
「この前説明した沖原の能力は常時発動だ。沖原の場合はさっきのように、そのうち疲れてきて最終的には気絶に至る。そして智東の能力は瞬間的に発動するものだ。もしかなりの疲労がたまっている状態で大きな魔法を放ったら…」
「…どうなるんですか？」
「暴走する。能力も、道具も。」
　道具も…？
「それってどういうことですか!?」
「俺達適正道具の能力者は、常に道具と関係を持っているんだ。こちら側は道具を使うもの、道具側は能力者に使われるものだ。適正道具のカリキュラムというものは、道具と能力を最大限に生かすため…つまりは、道具を使う力を育てるという事だ。この使う力が弱ければ弱いほど、早く疲労という形で道具から使用者に影響が出てくる。これが限界になると〝0〟。つまりは気絶だ。しかし…瞬間的に発動する能力で0をマイナスに振り切ると…」
「道具が使用者の言うことを聞かなくなるし、その道具は使用者の〝能力〟を吸い取ってしまうんだ。」

特訓（智東さんの場合）

「道具が能力を吸い取る…と言うと？」
　と智東さんは質問する。
「そのままの意味で、道具が使用者から能力を吸い取るんだ。そしてその能力で道具が暴走する。例えば…宮内の能力が暴走すると、その道具が実物のままになる。まぁ、暴走の程度は使用者の道具を使う力によるが…」
「ってことは、急に強い魔法を使うと駄目ってことね…」
「ま、そういうことだ。皆も、その辺にはよく気を付けてくれ。」
「了解です！」
「さて、智東の訓練を再開するか。ではさっきの指輪をつけてくれ。」
　はい…と智東さんが指輪をつける。
「まずは…魔法適性の基本の『五属性』からか。…と言っても、火と水は使ったことはあるみたいだが…」
「はい。なんで知ってるんです？」
「俺の適正道具を忘れたのか？」
「あー…」
　智東さんはドジっ子属性持ちの可能性あり
「さて、五属性の中でも基本となるのが『火』『水』『風』だな。主要三属性とも呼ばれる。」
「ほへー。」
　なんだその間抜けな声は。
「そしてあとの二つが『光』と『闇』だが…」
「闇!?」
　やっぱり。反応すると思った。
「闇なんて属性あるんですか!?」
「ああ…あるが…」
　桜庭さんも若干引いてる。
「私、闇属性使いたいです！」
　どっかで闇属性を好むなんてきのこかよ。ってどっかのコピペで

聞いた気がする。

「ダークホール!!」
　好きこそものの上手なれとはよく言ったもので、智東さんは闇属性の魔法をどんどん習得していった。
「桜庭…練習用の指輪にしておいてよかったな。強くてニューゲームってレベルじゃないぞ、あれ。」
「…本当に。闇属性へのあの異様な食いつきはなんなんだ…」
「桜庭さん！他にはどんな魔法があるんですか!?もちろん闇属性で！」
「ああ…そうだな…」
　と桜庭さんが言うと、長走先生が桜庭さんに近づいていき…コソコソ話を始めたようだ。
（桜庭、後教えられる闇属性魔法とかあるのか？）
（正直ないな…偏りなく教えたいのだが…）
（…智東って結構単純だよな？だったら…）
　ゴニョゴニョ・・・
（なるほど！それは名案だ！）
「智東…すまないが、後の闇属性魔法は他の属性との融合魔法でな…。その魔法習得に対する意欲は素晴らしいものだが、先に主要三属性から取得してみないか？」
「分かりました！頑張って習得します！」
　ちょろいなぁ…智東さん。

「だー…疲れたー…適正道具を使うってこんなに疲れるのね…」
　闇属性の時は全然疲れてなかったくせに。
「ふむ…とりあえず、火と水と風の基本は覚えたといったところだな。次からも同じような感じでやっていくぞ。」